し、以來囑托員小場恒吉氏が主としてその事に當つて苦心を重ねられたが、その成果は他方朝鮮古蹟研究會の多年に亙る調査と相俟つて、こゝに本書の公刊を見るに至つたのである。

本書收むる所の圖版百十一葉、それ〳〵に正確なる實測を記錄を加へ、或は復原圖を附し、又卷末には全山に及ぶ遺跡の分布圖を加へてそれぞれの遺跡の周圍と、この聖域の全貌を髣髴するに便せしめて居る。

圖版は南北に走る本丘の西面の北端より漸次南端に及んで各谷を訪れる次第となつて居るが、殆ど谷と谷とに寺址が見られ、或は倒壞せる石塔の簡明直截な直線と曲線との結合に新羅人特有の纖細な感覺を見、或はその肉厚な大まかな返り瓣のむつくりした肌を今はむなしく雨露にさらしてゐる蓮臺の纖細な内にも引きしまつた内なる力を見るにつけ、この丘冀、翠綠參差たる間に蠹を連ねたらう往時の盛んな有樣がしのばれ、又これ程の藝術品を產みながら、今は hermit nation と言はるゝまでに失はれてしまつた、この新羅人の豐かな心をいたはしく思ふのである。

又、更に驚くべき懸巖聳立し、松嵐峰を渡る幽境に端然と趺坐する靈像を拜するの神祕であつて、この地にこの像を安置した新羅人の心にくさは、東海の紺碧と松綠の間に石窟庵の尊像を見出した人々の心を等しくうつものであつて我々は、これ等新羅人が如何に彼等の土地を鄉土を理解し且つ愛し得た心豐かな人々であつたかを強く感ずるのである。

要するにそれ等は藝術品であると共に、又明かに一つの新羅の歷史を語るものでなければならぬ。自由に乏しい所謂半島國の代表的一例とも目せられる我が半島も、實はかくまで感情豐かに、詩もあり夢もあり、鄉土を愛し、又この盛な聖域を營むまでの熱列な信仰を持つた情熱の人の住家であつた事を本書は遺憾なく遺物遺蹟を以て傳へる貴重なる記錄であると言はなければならない。

然し同時に又我々は美術史の立場からしてこれ等によつて新羅の美の性格を考へる事も必要であらうし、支那或は我國の佛教美術との關係を考へる事も必要であらう。此の場合本書の如き根本的な調査の記錄が將來のかうした研究にも多大の貢獻をもたらす事を信ずるのである。

蓋しこの遺跡たる、懸崖側路相交り、流沙荊棘のはゞむ所、調査は極めて困難であつて從つて、又今日に至るまでこれ等遺跡がよく保存され得たのではあつたが、この多大の困難を押してせられた小場恒吉氏始め調査に從はれた方々の苦心に對して我々は大いに感謝しなければならない。（四六四倍、圖版百十一、地圖二、解說八十七頁、昭和十五年刊）（岡田芳三郎）

彙　報

西洋史讀書會

例　會　昭和十五年六月十九日、午後六時半より於樂友會館本

年度第二回例會を開催、原教授、村田、井上、前川の三講師を始め參會者二十四名。

一、B. Croce; Antihistorismus　二回生　青島　晃君

一、C. Dawson; The Making of Europe.　前川貞次郎氏

大會豫告　西洋史讀書會第八回大會は來る十一月三日(明治節)午後一時より樂友會館講演室に於て開催の豫定に付、當日諸學兄の御出席を乞ふ。

讀史會

例會　七月一日午後六時半より樂友會館第一號室に於いて開催、西田教授以下三十餘名出席。左記三氏の報告並に研究發表を行ひ最後に柴田實講師の右に關する批評感想談があつて十時過ぎ閉會した。

一、讃岐阿波見學旅行報告　二回生幹事　平松　令三氏

一、飛鳥時代人の佛寺佛像觀　三回生　毛利　久氏

一、墓制に就いて　副手　平山敏治郎氏

讀史會民俗學會合同例會　神道講義の爲め來學中の原田敏明講師を歡迎して九月二十七日午後六時半より學生集會所に於いて讀史會・民俗學會の合同例會を開催。出席者四十名、左記兩氏の講演があり同十時閉會した。尚西田教授の講演には兵庫縣賓塚長谷場純敬氏所藏の文書三卷並本朝皇胤紹運錄一卷を展示するところがあつた。

一、渡御神事に就いて　講師　原田　敏明氏

一、薩摩の長谷場氏に就いて　教授　西田直二郎氏

國史專攻學生讃岐阿波見學旅行記

六月六日、午後十一時京都發の夜汽車で宇野に向ふ。一行は藤助教授、柴田講師以下十七名。行手に待設ける四國といふ島國が一種神祕的な深さで迫つて來て愉しい豫想の裡に一夜が明ける。六月七日、よく晴れた爽かな朝、連絡船は瀨戸内海を渡つて高松に着く。埠頭には吾々の案内を快く御引受け下さつた高松高商の寺田貞次教授を始め京大文學部の先輩諸氏の顔が見え、その御案内で一行は高松を素通りして讃岐國分尼寺に向ふ。端岡驛に下車して國分尼寺から國分寺へ、更に國府廳址へと尋ねて歩く二里の田舍道は、見學最初の悦びに興奮した頭と、たどたどしい足どりとの交錯する裡に進んだ。尼寺址は現在眞宗の寺になつて居り、當時のものとしては礎石の散在を見るのみである。國分寺は四國第八十番の札所、仁王門を這入ると境内に塔と金堂の礎石が殆んど完全に舊の儘の配置で殘存し、塔の心礎の上には鎌倉時代のものと推定される七重の石塔が苔蒸して遺されて居た。現在の本堂は鎌倉時代の莊麗な建築で墓股も秀麗である。本尊の御開帳をして貰ふ。御厨子の中、高く仰ぐ丈六の千手觀音は古拙な技法のうちに祕められた逞しい力が吾々に强烈な印象を與へた。客殿で古瓦や生駒氏時代の古文書を拜見する。もう處々穫入れの濟んだ麥秋の道を急ぐと田圃の眞中に國府廳址がある。唯一つ遺る礎石の上に石碑が建てられてゐる。その直ぐ西の鼓岡文庫で香川縣出身

の偉人傑士の遺墨等を拜觀する。この邊りは崇德上皇の御遺蹟と傳へ奉る處であつて、ふと眼に付いた路傍の淸水にも上皇に關する御說話の語り傳へられてゐるのを農夫の口から聽いていとも深き感慨に衝たれたのであつた。

坂出驛で鎌田共濟會郷土博物館主事岡田唯吉氏の御出迎へを受け、同氏の御說明で博物館を見學する香川縣產業二千六百年史に關する資料の特別展觀及び縣下出土の土器、古瓦類等に深い興味を惹かれ、晝食の御饗應に預つてから善通寺行の汽車に乘つた。善通寺は眞言宗のメッカとも謂ふべき四國第一の靈場である。寶物館に入つて綸旨其他多くの古文書を見た。電車で琴平に出で、寺田教授の御配慮で旅館に小憩の後その勢で金刀比羅宮の長い石段を一氣に登る。寶物館で十餘點の宸翰を拜觀し、社務所では金網の外から應擧の襖繪に眼を凝らす。そしてホッと一息ついた時、讃岐平野が眼下に擴り讃岐富士が濃く美しい山容を浮き出させてゐるのに見入つた。歸途も先の場所でもう一度憩ひをとり、勤王家日柳燕石の史蹟を一覽して此處で寺田教授と御れし德島に向つた。途中池田で夕食、餘りにも目まぐるしかつた一日の見學から解放され、吉野川の溪谷を走る夜汽車の窓に凭れて、始めて淡い旅愁に襲はれてゐる自分を發見した。午後十時德島着、もう遲いのに御出迎へ下さつた鈴木、林兩先輩に感謝しつゝ更科旅館に疲れた身を運んだ。

六月八日、安らかな睡眠に新鮮な元氣を恢復した吾々は寸時を惜んで古本屋の店を漁つたりした。今日の活動は市內西船場町の西野商店に於ける阿波藍の製造工程の見學から始まる。素朴な手工業のうちに微妙な複雜な自然の變化が行はれてゐる。町並の藍の暖簾は、信仰的なものに締めつけられる樣であつた琴平のそれと違つて、此の町のさびた美しさを表はしてゐる。本縣史蹟調査委員小出恒男氏の御案內で城山に登り、城址と板碑を觀て、光慶圖書館に入る。縣社寺課の御厚意により晝食を御馳走になつてから、この旅行最大の眼目である阿波國文庫と、特に劍山の山奥から此處まで御持參下さつた三木宗次郎氏所藏文書及び市內の舊家牛田一之氏所藏の文書等を拜見した。阿波國文庫の稀覯書珍籍類は三萬餘册といふ洪量に達してゐるため極めて斷片的にしか見られなかつたのは殘念であつたが、然し宋版の代表的なもの數種を併せ見たゞけでも尠からぬ眼福であつた。牛田氏の文書は豐臣秀吉關係のものであつた。三木氏文書は大體鎌倉及吉野時代のもの四十六通であつて、その中には阿波忌部氏の一族としての三木氏が屢々卽位大嘗會料の荒妙御衣を織進せることにより下し賜はれるところの左辨官下文・綸旨等をはじめ、吉野朝廷に對して同氏の獻げ奉つた精忠を偲ぶに足る後村上天皇の綸旨、或は所領安堵狀並宛行狀等幾多の貴重なる史料を包藏し、かうした山岳武士團の性格を解明する上にも重要なる鍵となるものであらうと信ぜられた。大きな收穫に胸をふくらませて圖書館を辭し、バスにて勝浦郡多家良村の丈六寺に向ふ。此處からは郷土史家田所市太氏の御案內で藤原初期の丈六の阿彌陀及その胎內佛を拜觀して、小松島に出た。同町の西野嘉右衞氏宅を訪れて國賓の仲文章等本其他

古文書等を拜見する。前者は正安二年の奥書があるが、纖細優麗なその書風には貴族的な氣品があふれてゐる如くに思はれた。夜遲く汽船出發の間際まで御厄介になつた上、小松島港を發して大阪に向ふ。三日前の幾多の期待が今茲に豐かな收穫と將來への課題の堆積として抱かれてゐる。

六月九日、朝五時半天保山着、七時歸洛。旅行の全行程を無事終了した。終りに臨み今回の旅行に際して多大の御盡力を煩はした方々に對し深甚なる謝意を表したいと思ふ。（平松令三記）

地理學談話會

例會　七月二日午後二時於地理學實習室、出席者三十名。講演後活潑なる質問が行はれた。

一、地理學と辯證法　　米倉二郎講師

小牧教授渡滿　小牧教授は八月二十六日京都發新京に赴かれ、九月十七日無事歸學された。（川上記）

會報

◇會員移動

◇入會

京都市左京區北白川上池田町八　前田方　石田寛氏
同　伏見區東朱雀町九四一　石田一良氏
同　左京區北白川伊織町一五（立命館大學）　高瀨重雄氏
同　左京區吉田下大路町四　津田方　石田修一氏
同　左京區淨土寺石橋町八三　森島方　島道雄氏
同　左京區北白川上終町一〇一　木村方　岡本仁氏
同　左京區淨土寺馬場町一五　木原方　高田弘氏
大阪府高槻町高槻二六二　定豐穗氏
（以上平山紹介）
京都市東山區本町五條上ル森下町　堀井陽一氏
（楠正氏紹介）
大阪府立堺中學校　熊野一氏
（鷲淵一氏紹介）
大阪市東區谷町二ノ四一　田中梅子氏
（弘津德氏紹介）
京都市上京區寺町通丸太町南入　川勝政太郎氏
岐阜縣美濃太田町　林魁一氏
（以上梅原末治氏紹介）

◇轉居

兵庫縣武庫郡本山村野寄四三　岩崎孫八氏
大阪府豐能郡箕面村西小路一五〇　江崎雪氏

◇寄贈交換圖書　九月現在

北方文化研究報告　第三輯　北海道帝國大學

大倉精神文化研究所紀要 第一—三	大倉精神文化研究所	考古學雜誌 三〇ノ六・七・八・九	考古學會
東洋文庫朝鮮本分類目錄	東洋文庫	文化 七ノ六・七・八・九	東北帝大文化會
蒙古學報 第一	善隣協會	國學院雜誌 四六ノ六・七・八・九	國學院大學
日本諸學研究 第七—第十	日本文化中央聯盟	史迹と美術 十一ノ七・八・九	史迹・美術同攷會
東方學報 東京一一ノ二	東方文化學院	社會學徒 十四ノ六・七・九	社會學徒社
三品彰英著 朝鮮史概說	著者	和紙研究 六	和紙研究會
中國文學 六二・六三・六四	中國文學研究會	史學 十九ノ一・二	三田史學會
蒙古 一六・一七・七ノ九・十	善隣協會	龍谷史壇 二六	龍大史學研究室
中央文化研究會報 第一—三	中央文化研究會	史淵 二三	九大史學會
歷史と國文學 二三ノ一・二・一四一	太洋社	臺大文學 五ノ二・三	臺北帝大文學會
同願半月刊 四期・五期	佛教同願會	國民精神文化 六ノ六・七・九	國民精神文化研究所
古學叢刊 八期	北京古學院	史觀 二一	早稲田大學文學部
斯道文庫報 第二	斯道文庫	民族學研究 六ノ二	日本民族學會
長崎談叢 二六輯	長崎史談會	東洋史研究 五ノ四・五	東洋史研究會
無閑之 四三	むかしの會	軍事史研究 五ノ三・四	軍事史學會
史學雜誌 五一ノ七・八・九	史學會	哲學研究 二五ノ六・七・九	京都哲學會
歷史地理 七六ノ一・二・三	日本歷史地理學會	紀州文化研究 四ノ三	紀州文化研究所
社會經濟史學 十ノ三・四・五・六	社會經濟史學會	Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 5. June 1940, no. 2.	Harvard-Yenching Institute.
史學研究 十二ノ一	廣島史學研究會		
人類學雜誌 五五ノ六・七・八	東京人類學會		